

健康文化

## チェコのこと

寺田 幸正

もう旧聞に属することですが昨年9月にチェコに行く機会がありました。その列車旅行の際の見聞を書いてみたいと思います。

8月29日に関西空港からアムステルダムに飛び、飛行機を乗り継いでその日の夕刻ウィーンに着きました。ウィーンでは2日ほど観光した後、列車でチェコ第二の都市であるブルノに向かいました。ウィーンはドイツ語圏に属しますが、それでも英語を理解する人が多く、通貨はユーロです。しかし、チェコはほとんど英語が通じず、通貨もコルナという単位でした。

列車はヨーロッパのいくつかの国を結ぶ国際列車で、私には初めての経験でした。あちらでは駅に改札口が無いので直接プラットフォームに向かいますが、ホームの端に何か書いた看板が置かれていました。何のことか分らずにいると通りがかりの青年が先日の洪水のせいで列車のルートに変更があったこと、私の目的地がブルノなら全く影響の無いことを教えてくれました。2002年の8月にチェコやドイツを中心とする中部ヨーロッパで洪水による大きな被害があったことは、ご記憶の方も多いでしょう。ブルノまでは約2時間の旅です。私は自由席の切符をもっており、日本の新幹線のように指定席の車両と自由席の車両が別になっているものと思い込んでいました。長いホームを荷物を引っ張って歩きましたが、自由席と表示された車両が見つかりません。先程の青年が通りかかったので再び尋ねると自分は指定席なのでずっと向こうの車両だが、自由席ならこの辺りのどの車両でも大丈夫だと教えてくれました。偶々乗った車両は日本と同じように通路をはさんで4人がけの座席が並ぶタイプでしたが、列車にはいろいろのタイプの車両が混在しており、映画などでお馴染みのコンパートメント式の車両もありました。あまりにも各車両の外見や座席タイプがまちまちなので、列車が通過する国々が車両を出し合って編成しているのかなと想像しました。

車内に入ると、窓の上の座席番号を表示するところに、二つ折りにした黄色

い紙をはさんだ一画があり、近くの女の子に訪ねるとそこが指定席でそれ以外はどこに座ってもよいということでした。列車が走り始めると車掌が検札にやってくるのですが、この女の子のところで何やらトラブルがある様子でした。どうやら彼女の目的地は洪水によるルート変更のため通らないらしく、その後彼女はあちこちに携帯電話をかけて迎えを頼んでいる様子でした。

列車は比較的空いていて少し離れた席からはチターを爪弾く音が幽かに聞こえてきます。チターはギターに似た楽器で独特の軽やかさと哀調をもつ音色は、オーソンウェルズの映画「第三の男」でも知られています。あの映画の舞台であったウィーンをチターの調べに乗って遠ざかるのは、何だか追われているようでドラマチックです。しかし、現実には映画と違って静かな昼下がり、幽かなチターの響きと車窓を楽しむ、旅の至福を感じさせるひと時でした。

通路を挟んだ隣の一画は4、5歳くらいと思われる姉弟を連れたチェコ人(想像)の若い夫婦でした。親子でトランプをしたりして楽しそうな様子でしたが、そのうち母親が子供たちに本を読んで聞かせていました。言葉は理解できませんが流暢な朗読でした。後で座席に置かれていた本の表紙を見ると”Harry Potter”と書かれていたのには、世界中どこも同じなのだなどと苦笑しました。

列車は特急なので停車駅は少ないのですが、オーストリアとチェコの国境を挟んでは比較的近くに2つの停車駅があります。オーストリア側の駅を出ると間もなく兵士が来てパスポートをチェックし、出国のスタンプを押していきます。銃をもった兵士にパスポートを渡すのは初めての経験でした。国境を越えると今度はチェコの兵士が来てパスポートに入国のスタンプを押していきます。地元の人達にとって国境を越えることはそれほど特殊なことではないのかもしれませんが、日本人にとっては、たった2時間の列車の旅という日常的な行為の中で国境を越えることに不思議な感情をもちました。広々とした平野の中に人為的に引かれた国境線(小さな川があったかも知れませんが)というものの不思議さを感じました。現在北朝鮮からの脱北者がマスコミの話題になっていますが、全く平和なオーストリアとチェコの国境を越えるときに銃をもった屈強の兵士が乗り込んで来たことを思うと、脱北という行為がどれほど勇気を要するのか、想像するだけでも足が震えそうです。

チェコは以前はチェコスロバキアという1つの国でしたが今はチェコとスロバキアという2つの国に分かれています。ブルノはそのチェコではプラハに次ぐ第二の都会です。この街でコンピュータケミストリーに関する国際学会が開

かれ、それに出席するのが今回の旅の目的です。学会はマサリクという伝統のある大学で開かれました。宿泊には夏休み中で学生のいない寮を使わせてくれました。部屋は二人部屋で机が2つにベッドが2つ、あとはキッチンとバスルームだけという、生活に必要なものは備わっているがそれ以外には何も無い、美しくもなければ不潔でもないというものでした。しかし、ウィーンやプラハと違って宿泊費が安く済むのは大歓迎でした。学会は大学内の近代的なホールで開かれましたが、オープニングセレモニーだけは、遺伝の法則で有名なメンデルがいたという修道院の、格調高い一室で行われました。学生寮から修道院までは徒歩で30分ほどかかるのですが、ボランティアに案内されて十数人が歩いて移動しました。皆さん当然のように歩いていましたが、日本でならマイクロバスでも用意しないと学会主催者に文句が出るほどの距離でした。大学周辺は鬱蒼とした木々の向こうに立派な建物がちらりとみえるという羨ましいような高級住宅街でしたが、街全体に活気がなく空家になっているところも多いようでした。

その後、先日と同じ列車を使ってチェコの首都プラハに向かいました。プラハの街にはいくつかの駅があるようで、我々の列車は通常なら北駅（ホレショヴィツェ駅）に着くことになっているのに、洪水の影響で北駅が使えないらしく、中央駅に到着しました。北駅から宿泊予定のホテルまで地下鉄を使って簡単に行けることを確認してあったのですが、中央駅に着いたということで予定が狂いました。地下鉄が走るのは市内のほんの一部の区間だけで、北駅周辺もホテルの近くも地下鉄はストップしていました。地下鉄の他には路面電車が走っており、市内を縦横に結んでいるのですが、ストップしている地下鉄を補うものとして特別なルートを走る臨時路線もいくつかあるため、特にややこしくなっています。ウィーンでもそうでしたが路面電車に乗るための切符の買い方や料金システム等、分ってみれば合理的ですが日本人には馴染みが薄く、ホテルに行き着くのに一苦勞でした。

プラハは世界に冠たる観光都市で街全体が美術品といってもいいほどです。特にプラハ城からカレル橋にかけては観光客も多く楽しめましたが、絵画や彫刻等のアートも見たく中央駅近くにある国立博物館に出かけました。いやしくも一国の首都の中心にある国立博物館です。どんな素晴らしい芸術を見ることができるのか楽しみにして出かけました。外見は歴史を感じさせる堂々たる建造物で期待は益々膨らみましたが、中に入って驚きました。広い展示室の中は

世界中の動物の剥製や鉱物標本ばかりで、多少の工芸品の展示物以外は、アートと呼べるのは天井や柱の飾りくらいです。アメリカによくあった自然史博物館は展示に工夫があり、剥製も鉱物標本もそれなりに楽しく見られるものでしたが、プラハのそれは、分類して並べてあるだけという感じです。考えるにドイツやロシアといった近隣の強国に占領された期間が長く、国の宝というべき美術品は全て持ち出されてしまったのでしょうか。私は中世キリスト教芸術に興味を感じており、プラハ城やいくつかの教会で感動していましたが、もっと他に無いのだろうかと思図を探したところ、ある修道院の中にキリスト教美術史の美術館があることを知り、出かけました。ようやく修道院を見つけ、入り口を探して建物の周りを歩きましたが、どうも人通りの様子から悪い予感がすると思っていたら案の定美術館は洪水のため閉鎖されていました。プラハは洪水の被害が大きかったようで、修道院の近くにはまだ建物から土砂を運び出している区域がありました。

プラハに3日滞在し、また列車でウィーンに帰ることになりました。先ず列車が平常どおりの北駅から出るのか、臨時の中央駅から出るのかが問題です。ホテルでは中央駅から出るようだと聞いていましたが、念のため時間に余裕を持って中央駅に出かけました。列車の案内は電光掲示板に表示されます。出発に近い列車が最上段に表示され、発車すると表示が消えて一番下に新しい列車が加わり、順次上に移動します。1時間半くらい前に我々の乗る予定のウィーン行きが現れたので、中央駅で間違いなかったと一安心しました。その後表示位置が次第に上に移り、10分遅れなどという情報は表示されるのに出発ホームの番号が空白のままです。出発時刻が迫り後発の列車にもホーム番号が表示されているのにウィーン行きだけにはいつまでたっても表示されません。何時でもホームに移動できるよう、チェココルナをユーロに両替し、いらいらしながら待っていると周りにも同じように心配顔でウィーン行きを待つ人が増えてきます。堪りかねて案内窓口へ出かけました。何人かの列の最後尾に付き、ようやく自分の順番になったので話し始めると窓口のおばさんは煩そうな手振りであっちに行けと言うだけで答えようという気配もありません。要するにその窓口はチェコ語専用で英語には答えないということのようです。インターナショナルの案内所を見つけて事情を説明すると、自分たちも電光掲示板以上の情報はもっていないという返事でした。どこも日本では考えられない不親切さですが、こんなこともありました。切符を買おうと並んでいる人達を見ていると突

然窓口が閉められました。まだ何人かの人が並んでいるのに一切説明は無い様子で、決められた時間がくれば何人待っていようと閉じてしまうようです。その代わりにいくつか並んでいる窓口のどこかが開くのでそちらに並びなおせばよいのですが、日本でなら到底考えられないサービスの悪さでした。電光掲示板に到着ホームが表示されたのは10分遅れの列車が到着する15分前すなわち定刻の5分前という状態でした。無事列車に乗ることができ5時間ほどの旅をゆっくり過ごせました。列車が南に進むのだから当然のことなのかも知れませんが、車外の景色がオーストリア国境に近づくに従って次第に緑が多くなり豊かになって行くのが印象的でした。チェコがビロード革命と呼ばれる無血革命によって社会主義を脱してから十年以上になります。もっと若々しく活力のある国を想像していたのですが、一旅行者の目には何だか元気が無さそうに映りました。

(名城大学情報センター教授)